

1. 本校におけるカリキュラム・マネジメント

吉名学園では、「自立した学び」の実現に向けて、子供・教職員・地域・保護者と共に学びを創り上げること（「共創」）を目指している。そこで、本校では、カリキュラム・マネジメントに関わる研修を、教科・学年の枠を超えて教職員同士が知恵を出し合う「共創」の場と位置付け、子供たちの「自立した学び」の実現に向けて教職員同士の「共創」によってマクロなPDCAサイクルを回している。

2. 全体像（マクロな PDCA サイクル）

段階	時期	活動内容 (教職員同士の「共創」のプロセス)	ねらい
PLAN	4月～5月	異学年グループでの「材」の検討会 複数の教職員で「材」について、ウェビングを用いた分析を行い、単元の検討を行う。	多角的な視点で材の可能性について検討し、子供の思いや願いの想定、子供の思い・願いを醸成するしかけの設定などの単元構想を練る。
DO	通年	子供と共に創る単元の展開 日々の授業において、子供の思いや願いに基づいて、柔軟に計画を変更・調整しながら単元を展開する。	学びの主権を子供に返し、子供の思いや願いに基づいた探究的な学びを展開する。教師は伴走者として共に探究する。
DO CHECK	通年（適宜）	研究授業と事後協議 研究授業では、全教職員で授業中の子供の姿から資質・能力の発揮を見取る。事後協議では、それぞれの教員の見取りを交流し、資質・能力が発揮された要因を分析し、今後の単元の方向性を全体で協議する。	目の前の子供の姿を基に、その子が資質・能力を発揮するプロセスを解明する。また、今後の単元の展開に向けて、次なるしかけを全教職員で検討する。
CHECK ACTION	長期休業中 (夏・冬)	中間振り返り 単元の進捗状況や印象的だった出来事、単元を通じたそれぞれの子供の変容を交流し、今後の単元の方向性を検討する。	各学年の単元のよさや課題から探究を生み出すポイントを導き出したり、行き詰まりを教職員同士の「共創」によって解消したりして、単元を再構築する。
CHECK ACTION	年度末	単元全体の省察と継承 今年度実施した単元のよさや改善点、来年度に向けた提案を可視化し、次年度へ引き継ぐ。	成果や課題（失敗や困難）を学園の財産として蓄積し、次年度のより質の高い探究へとつなげる。

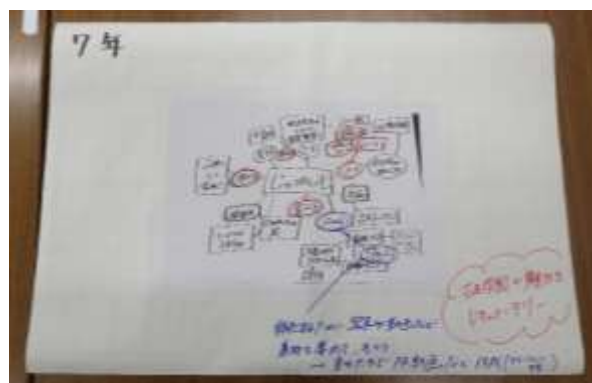
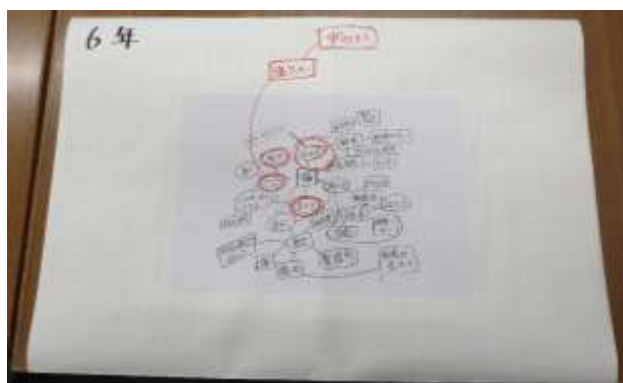
3. 具体的な実践プロセス

【P】 材の可能性を拓く「異学年グループでの「材」の検討会」

単元の立ち上げ期に、担任が扱おうと考えている「材」について、異学年グループでウェビングを用いた分析を行い、「材」の価値や「材」を中核に置いて展開できる学びについて話し合います。

手法：模造紙の中央に「材」（例：じゃがいも、塩など）を置き、関連するキーワードを書き加えます。また、その模造紙を職員室内のいつでも見られる場所に掲示し、適宜付け加えを行います。

効果：異学年の教職員との対話を重ねることで、「材」を見る眼が豊かになります。ウェビングによって視覚化することで、単元の広がりや可能性を一目で捉えられるようになり、具体的な学習場面のイメージが鮮明に共有されます。その結果、子供が自ら「問い」をもち、主体的に動き出すためのアイデアが、より豊かになります。



【D】 学びの主権を返す「子供と共に創る単元の展開」

PLANで練ったウェビングを基に、「単元づくりの五つのポイント」を踏まえながら、子供たちの思いや願い、反応を見ながら単元を展開します。

実践：教師は、学びのルールを敷くのではなく、子供の思いや願い、反応に基づいて、単元計画をその場で調整・変更できる柔軟性を持ち、子供が自ら舵を握る姿を支えて、共に探究する伴走者に徹します。

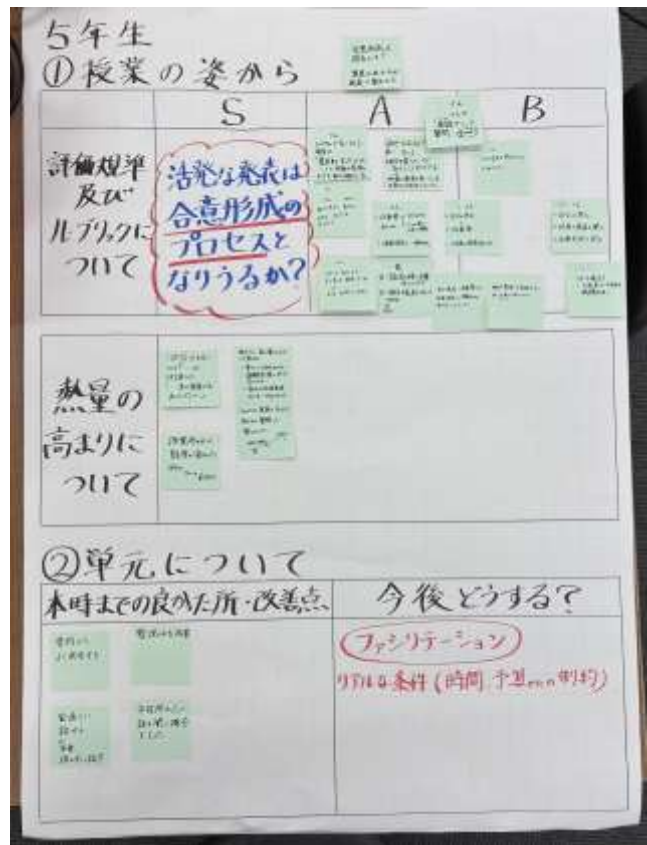
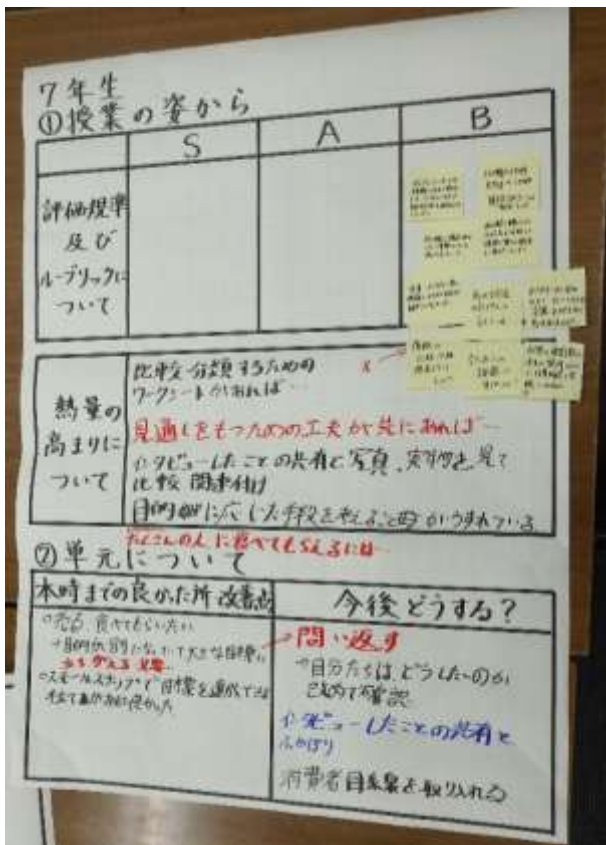
[D/C] 子供の姿に基づいて「自立した学び」を追究する研究授業と事後協議

日々の授業・単元（D0）の評価（CHECK）を教職員同士の「共創」を通して行う場として、研究授業と事後協議を位置付けています。

資質・能力の見取り：子供の具体的な姿（発言、行動）から、どの資質・能力が発揮されたかを協議します。

資質・能力の発揮の分析・考察：なぜ、その資質・能力が発揮されたのか、目の前の子供の資質・能力を発揮するプロセスや要因としての教師の働きかけや環境構成について全教職員で分析・考察します。

単元の再構築：協議に基づき、子供の資質・能力がより豊かに発揮することができるための方策を練り上げます。単元のよかった点や改善点を踏まえ、子供の探究がさらに深まり、広がるための働きかけや環境構成の在り方を全教職員で検討します。



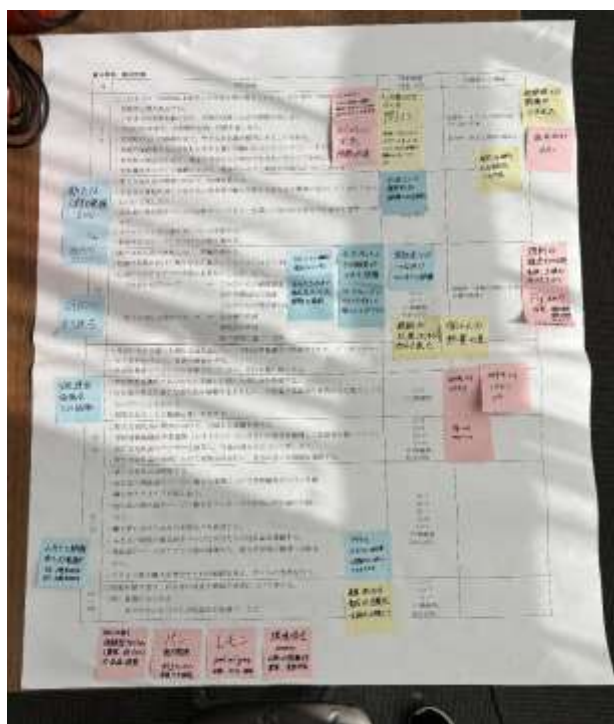
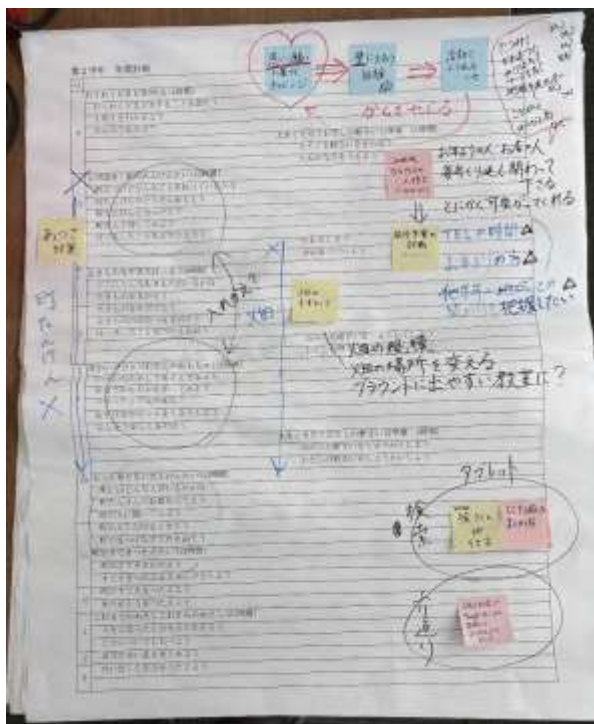
【C/A】 「実践の知」をつなぐ「単元全体の省察と継承」

年度末、年間指導計画を基に、単元全体の成果と課題を全教職員で振り返ります。

Step 1 : 「今年やってよかったこと (青色)」「改善点 (黄色)」「来年やろうとすること (人材活用、他教科との関連、ICT 活用など) (ピンク色)」を付箋に書き出します。

Step 2 : 年間指導計画の該当箇所に貼り付け、視覚化された「生きた資料」を作成します。作成した資料を交流し、そこから見出される子供の探究を実現させるポイントを協議します。

Step 3 : 次年度の担当者へ、資料を基に詳細な引き継ぎを行います。



4. 成果と今後の展望

本校のカリキュラム・マネジメントによる最大の成果は、教職員自身の「眼」が育つことです。異学年グループでのウェビングを通して同僚の多様なアイデアや見方・考え方に触れることで、「材」の価値や可能性を多角的に捉える「材」を分析する眼が育ちました。また、全教職員で実際の子供の姿を基に資質・能力を発揮した姿や可能性について交流することで、「子供を見取る眼」が豊かになりました。さらに、ある教職員からは「これまで行ってきた研究授業の中で一番楽しみです」という言葉が聞かれました。これから、どう進むのか分からない探究に対して教師自身もワクワクしながら、子供と一緒に探究することを楽しむ姿が見られるようになったことも成果です。今後は、年度末の振り返りで出された課題を受け止め、「人が変わっても吉名学園の学びが受け継がれる仕組み」を確立していきます。教職員の異動があっても、これまで積み上げてきた「実践の知」が組織の財産として継承され、誰が担当しても「自立した学び」が実現されるような体制と風土を醸成します。この「探究×共創」の取り組みを、単なる一過性の研究プロジェクトで終わらせることなく、吉名学園の普遍的な風土として定着させることが、子供たちの「自立した学び」を永続的に支える基盤になると考えています。